

國學院大學學術情報リポジトリ

ウィーンとスロヴェニアにおける社会民主主義運動
の原風景：
イヴァン・ツァンカル「お針子」を手掛かりに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-22 キーワード (Ja): 世紀転換期, ウィーン, スロヴェニア, 社会民主主義運動, イヴァン・ツァンカル キーワード (En): 作成者: 宍戸, 節太郎, Shishido, Setsutarō メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000730

ウィーンとスロヴェニアにおける 社会民主主義運動の原風景

——イヴァン・ツァンカル「お針子」を手掛かりに

宍戸節太郎

1866年、ハプスブルク帝国はプロイセンとの戦争に敗れ、統一ドイツから排除された。翌1867年、ハプスブルク帝国はハンガリー王国に大幅な自治を認め、新たに「東欧帝国」⁽¹⁾としての道を歩み始める。これまで長く少数のドイツ人が、多数の異民族を専制的に支配してきたオーストリアでは、支配層がハンガリーのマジャール人貴族と手を結び、スラヴ系その他の諸民族は、オーストリア＝ハンガリー「二重帝国の決定的な反対者の地位」⁽²⁾に追いやられた。矢田俊隆はかつて、第1次世界大戦にいたるこの時期のオーストリアを、「ドイツ・スラヴ両民族の激突時代」⁽³⁾と呼んだ。

憲法第19条には、たしかに民族の平等が保障されていた。

国家のすべての民族は、対等な権利を有する。またそれぞれの民族は、その民族性と言語を守り育てる、不可侵の権利を有する。

学校、官庁、公の生活において、州で日常使用されるすべての言語は、対等な権利を国家により承認される。

複数の民族が住む州においては、公的な教育機関は、次のように設置されなければならない。すなわちこれらの民族のどの民族も、他の民族の言語習得を強制されることなく、自らの言語による教育に必要な手段を手にする。

Alle Volksstämme des Staates sind gleichberechtigt, und jeder Volksstamm hat ein unverletzliches Recht auf Wahrung und Pflege seiner Nationalität und Sprache.

Die Gleichberechtigung aller landesüblichen Sprachen in Schule, Amt und öffentlichem Leben wird vom Staate anerkannt.

In den Ländern, in welchen mehrere Volksstämme wohnen, sollen die öffentlichen Unterrichtsanstalten derart eingerichtet sein, daß ohne Anwendung eines Zwanges zur Erlernung einer zweiten Landessprache jeder dieser Volksstämme die erforderlichen Mittel zur Ausbildung in

seiner Sprache erhält.⁽⁴⁾

ここには民族の平等が、同時に言語の平等であることが記されている。ただし、これは当時のオーストリアの現実などではなく、また、その実現のための道筋が示されているというわけでもない。民族ならびに言語の平等は、国家や州の法律、地方自治体の条例、各省の省令などを通じて、またその運用を通じて、実現されなければならない性格のものだった⁽⁵⁾。

1880年4月、エドゥアルト・ターフェ (Eduard Taaffe, 1833-1895) 内閣のもと、チェコ西部ボヘミア、チェコ東部モラヴィアの出先機関に出された省令には、住民の窓口対応の使用言語「外務語」として、ボヘミア、モラヴィアで使用される二つの言語、チェコ語とドイツ語が対等であることが明示された。1882年には、1348年設立の、ドイツ語圏最古の大学プラハ大学が、チェコ部とドイツ部に分割された。1897年、カジミール・フェリクス・バデーニ (Kasimir Felix Badeni, 1846-1909) 内閣ではさらに、ボヘミア、モラヴィアの行政機関内部の使用言語「内務語」に、ドイツ語に加えて、チェコ語使用の義務化が企図された。公職を得るのに、チェコ語の習得が必須となるドイツ系住民の反発はやまず、ボヘミア、モラヴィアから、オーストリア各地に騒動が波及する。バデーニ内閣は、結局この年退陣に追い込まれた。のちのアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889-1945) の政治的戦術・戦略に決定的影響を与えた一人、ゲオルク・シェーネラー (Georg Schönerer, 1842-1921) の急進的ドイツ・ナショナリズム、汎ドイツ運動の背景には、鬱積したドイツ系住民たちの不満があった⁽⁶⁾。

スロヴェニア現代文学の祖、イヴァン・ツァンカル (Ivan Cankar, 1876-1918) は、1898年11月から1909年9月までの10年余り、活動の拠点をウィーンに置いた。この間ウィーンは、カール・ルエガー (Karl Lueger, 1844-1910) が市長を務める、オーストリア・キリスト教社会主義運動の、まさに全盛期だった。ルエガーの施策は「都市社会主義」とも呼ばれ、都市生活の基盤である社会資本整備を通じて、大規模な都市改造が行われた。電気、ガス、水道、公共交通機関など、次々と公益事業を市有、市営化し、都市全体としての社会改良が目指された。田口晃によれば、今日でも、ウィーン市民が夏でも上質の飲料水を十分享受できるのは、「ルエガー市政最大の功績と評する声も多い」⁽⁷⁾という。ウィーンの都市の景観、市民生活には、大きな変化がもたらされた。

一方、ルエガーが運動の拡大に利用したのは、政治的手段としての反ユダヤ主義、政治的、経済的反ユダヤ主義だった。自由主義、資本主義体制下で、ヒトラーの言葉を借りれば、「生存を脅かされた」⁽⁸⁾中産労働者階層と、影響力の低下したキリスト教、カトリック教徒たちを利するよう、キリスト教社会党 (Christlichsoziale Partei) の批判の矛先が、ウィーンのユダヤ人たちに向けられた。ルエガーの反ユダヤ主義もまた、シェーネラーの急進的ドイツ・ナショ



カール・ルエガー像
(2023年9月、撮影筆者)

ナリズム、汎ドイツ運動とともに、のちにヒトラーへと受け継がれた⁽⁹⁾。

ウィーン中心部、市民たちの憩いの場の一つカール・ルエガー広場には、ルエガーを記念する大きな立像が設置されている。いまもウィーン市民を見守るルエガーだが、足もとの台座に目をやると、大きく赤字で、「SCHANDE」と書かれた落書きが散見する。「シャンデ」(Schande)はドイツ語で、「恥」や「恥辱」、「不名誉」、あるいは「恥さらし」を意味する。ルエガー評価の難しさを物語っている。

キリスト教社会主義運動は、スロヴェニアでも活発な広がりを見せた。1892年にカトリック民族党 (Katoliška narodna stranka/Katholische Nationalpartei) が結成され、1905年スロヴェニア人民党 (Slovenska ljudska stranka/Slovenische Volkspartei) に改称、ヤネス・エヴァンゲリスト・クレク (Janez Evangelist Krek, 1865-1917) の活躍で、スロヴェニア語使用地域の農村部で多数派を形成した。労働者・自営業協会、広範なカトリック文化団体のネットワークを築き、クレクの尽力の結果、とりわけ農村部でスロヴェニア人の生活を改善

し、次第に都市や商業地でも影響力を増した。

1848年の革命以来、長い間民族の権利、スロヴェニア人居住地の統一、スロヴェニアの自治を求めて戦ってきたリベラル派もまた、カトリック党に遅れること2年、1894年に民族党 (Narodna stranka/Nationale Partei) (1905年民族進歩党 (Narodno napredna stranka/Nationale Fortschrittspartei) に改称) を結成する。中間市民層の支持獲得を目指し、リベラル派は、都市や比較的大きい商業地に候補者を擁立した。1896年には、リュブリャーナ (Ljubljana) (ドイツ語名ライバッハ (Laibach)) を州都とする現在のスロヴェニアの中核地クライン (Krain) (スロヴェニア語名クランスカ (Kranjska)) 州で、ドイツ人大土地所有者たちとの連立を選択、1908年までクライン州議会で多数派を保持した。ただし、スロヴェニア・ドイツ・リベラル同盟は、スロヴェニアの一般大衆には受け入れられなかった。市民層への片寄った支援が若い知識人や学生たちの反発を招き、若年層のリベラル派離れが加速する。リベラル派は、民族的熱狂を諷い文句にしなが、求心力あるスロヴェニアの未来を描くことができず、もはや都市に暮らす一部市民層の利益を代表するだけの存在になっていた。

ツァンカルは、1907年5月、落選したとはいえ、南スラヴ社会民主党 (Jugoslovanska socialdemokratska stranka/Jugoslawische sozialdemokratische Partei) (1896年結成) 候補として、帝国議会議員選挙に立候補する。ツァンカルの選択は、リベラル派でも、キリスト教社会主義運動でもない社会民主主義運動に、彼がスロヴェニアの未来を託したことを意味する。本稿は、イヴァン・ツァンカルの小説「お針子」(Šivilja, 1902)⁽¹⁰⁾を手掛かりとしなが、以下、世紀転換期のウィーンとスロヴェニアにおける、ツァンカルと社会民主主義運動との関わりについて検討する。

1. 「お針子」が描く社会空間

一人の学生と、貧しさのなか、ひたむきに生きるお針子マルチの悲恋を描いた、イヴァン・ツァンカルの短編「お針子」は、ツァンカルの全集版編者の一人ドゥシャン・ヴォグラール (Dušan Voglar, 1936-) によれば、1902年1月9日から2月18日の間に書かれた四つの作品の一つで、構想は1901年秋にさかのぼる⁽¹¹⁾。ツァンカルは、1899年11月中旬、ウィーン郊外の労働者街、16区のオッタクリング (Ottakring) に移り、リンダウアー通り (Lindauergasse) 26番地に部屋を借りて住み始める。部屋の貸主は、離婚して上に二人の女の子シュテフカ (Štefka, 1887-1962) とアマーリア (Amalia, -1902)、下にも二人の男の子ヴィリー (Willy) とアルフレート (Alfred) と、四人の子供のいるチェコ系のお針子、アルビナ・レフラー (Albina Löffler, 1865-1944) で、ツァンカルはここで以後約10年間、ウィーン時代の最後までを過ごした⁽¹²⁾。小説のタイトル「お針子」が、部屋の貸主ア

ルビナ・レフラーの職業と一致し、構想と執筆が、転居後まもなくの時期に当たってはいるが、物語は、さしあたりツァンカルの伝記的事実とは異なる。実際、ツァンカルは1904年2月以降、上の娘のシュテフカと恋愛関係になっている⁽¹³⁾。ただし、「お針子」は遅くとも1902年2月18日には書き上げられており、シュテフカとの関係はそれからおよそ2年ほど後のことになる。

物語は、一人称の語り手「私」によって始められる。ある日の日暮れ前、居酒屋に立ち寄ると、「私」はそこに見覚えのある顔「彼」を見つける。「私」は「彼」とこの1年ほど会っておらず、「彼」の近況を何気なく尋ねている。

「相変わらず、去年いたところに住んでるのかい？」。

「もうあそこには住んでないよ」。

„Ali stanuješ še zmerom tam, kjer si bil lani?“

„Nič več ne stanujem tam.“ (S. 157)

「彼」は大学で学び、今は「代用教員」(„suplent“, S. 156) をしているという。「私」は「彼」と打ち解けて話すことのできる、少なくとも対等な関係にある。登場人物は、二人とお針子の「マルチ」(„Malči“, S. 157)、彼女の両親、ほかに最後に「身なりの立派な御婦人」(„ellegantna dama“, S. 167) の、六人が個人として登場する。固有名を与えられているのは「マルチ」一人のみだ。ほどなく「彼」が、「私」にとっては「わずらわしい」(„sitno“, S. 157) マルチとの一件を話し始める。「ずっともう、自分がしでかしたことの顛末を、誰かに話したくってね」(„že davno sem mislil komu povedati, kako sem napravil“, S. 157)。だが、「彼」の話はここから最後まで、直接引用の「僕」、つまり「彼」自身によって語られる入れ子式になっており、物語冒頭の語り手「私」とは、形式的に入念に隔てられている。

「お針子」には、舞台となる土地や、時代背景を知るための情報が少ない。マリア・ヴェラ・クラリチーニ (Maria Vera Claricini, 1946-) は、彼女の秀逸なツァンカル論の中で述べている。

ツァンカルのウィーン、それは少ない例外を除いて労働者街、とりわけオッタクリングだった。ウィーンが舞台となっているということに、作家の伝記が唯一の手掛かりとなることもしばしばある。とくに初期の短い散文作品では、町の名前が言及されることがほぼ一度もない⁽¹⁴⁾。

クラリチーニが指摘する通り、小説の舞台となる町の名前は登場しない。「彼」の居場所は「町外れ」(„predmestje“, S. 164 u. 166) であり、「町」はただ、「町」(„mesto“, S. 166f.) とだけ表現される。町外れから町に入って、反対側の町外れまで、ほぼ駆け足で「1時間ほどの距離」(„uro daleč“, S. 166) とされており、

居酒屋や通りには、個人が特定されない、匿名の「人々」(,ljudje', S. 156 u. 166)も居合わせる。「彼」は、おそらく町の「大学に学ん」(,študirati', S. 157) であるのだが、小説中ほかに手掛かりは、オーストリア＝ハンガリー帝国内で使用された通貨、「グルデン」(Gulden) (,goldinar', S. 159)⁽¹⁵⁾と「クロイツァー」(Kreuzer) (,krajcar', S. 167)⁽¹⁶⁾が登場する。「僕」によって語られる出来事の時間は、彼がマルチと彼女の両親のもとに暮らした、「約1年ほどそこにいて、秋になってやっと引っ越しをした」(,skoro leto dni sem bil tam, šele jeseni sem se preselil', S. 157) 1年間と、その後偶然通りでマルチと再会する、「クリスマス前」(,pred božičem', S. 167) までの、およそ1年余りになる。

最初に語られるのは、「僕」の厚遇ぶりだ。彼はおそらく全部で二部屋しかない、マルチのところに間借りしており、彼の部屋はとても感じがよく、窓からは庭も見え、マルチの家にあった立派な家具は、すべて彼の部屋に運び込まれていた。一方マルチたちの部屋は、小ぎれいに片付けられていたものの、「貧しさ」(,siromaštvo', S. 157) は隠しようもなく、マルチと彼女の両親三人が、この同じ部屋で寝ている。朝は彼の部屋に朝食が運ばれてくるが、最初の一ヶ月、彼が彼らと言葉を交わすことはほとんどなかった。彼にとってマルチとその両親は、彼と「同等な」(,na isti stopinji', S. 157f.) 関係にはなく、小説の「僕」は、社会的に特異な立場に位置づけられている。

スロヴェニア出身の学生が自分の出身地域で、母語で大学教育を受けられるようになったのは、1919年、リュブリャナ大学設立以後のことである。ツァンカルの時代、クライン州に高等教育機関、大学はまだなく、大学での高等教育を目指す者は、ギムナジウム (Gymnasium/gimnazija) などの中等教育機関に通った。このレベルの教育を受けられたのも、当初はわずかな人数の、もっとも優れた男子生徒に限られ、教育の言語はおもにドイツ語だった。ツァンカルの通ったリュブリャナの実科学校 (Realschule/realka) は、ギムナジウム同様、大学での高等教育を目指す者が通う中等教育機関で、ギムナジウムがエリート主義的、人文主義的傾向であるのに対して、実科学校は自然科学や、広く教養教育に主眼が置かれていた。アレシユ・ガブリチ (Aleš Gabrič, 1963-) によれば、例外的ではあったものの、女子生徒も中等・高等教育を受けられるようになったのは、19世紀の末頃からであるという⁽¹⁷⁾。大学に学ぶ学生は社会の中で、きわめて特権的な立場にあった。青春時代の、甘い、やり切れない恋物語を描いているように見えて、ツァンカルの「お針子」は、貧しさのなか懸命に生きる人々と、無自覚に豊かな生活を送る人々との、社会的対照を描き出している。

マルチは、朝5時には縫いものを始め、夜は11時、夜中まで働き、ときには一晩中横になることなく、縫いものを続けることもあった。そんな日のマルチの目は赤くはれ、唇はかさかさ、顔などはげっそりしていて、「僕」の目には、「まるで醜く」(,skoro grda', S. 159) さえ見えた。彼女の父親は、かつてはどこかの工

場で働いていて、稼ぎもそれなりにあり、立派な家具もそろえていたものの、いまはずっと家にいて、おそらく「痛風」(protin', S. 159)に悩まされている。日中彼はほとんど椅子から立ち上がることなく、夜は「うめき声を上げた」(stokal', S. 159)。母親も母親で、「病気がちで、体が弱く」(bolehna, slabotna', S. 159)、「子供じみた」(otročja', S. 159)様子で、娘のマルチがむしろ親のように彼らの面倒を見、それでも彼女は不平を言うこともなく、「少なくとも、僕は耳にしたことがなかった」(jaz vsaj je nisem slišal nikoli', S. 159)。

物語は、「僕」のふとした気まぐれから動き出す。「春」(na spomlad', S. 158)、ある朝目覚めると、部屋に太陽の光が差し込んでいて、「僕」はベッドから飛び起きカーテンを開けた。「すばらしい日で、僕は朝起きて、外の天気がいいのがこの上なく好きだ」(Čudovit dan je bil in jaz imam tako rad, če je zjutraj, ko vstanem, lep dan zunaj', S. 158)という。そこへいつも通り、7時にマルチが朝食を運んできた。「特別何か考えたわけではなく、ただうれしくて満ち足りていた。僕は彼女の手を取り、彼女の方に身をかがめ、彼女の唇にキスをした」(jaz nisem mislil nič posebnega, samo vessel sem bil in zadovoljen. Prijel sem jo za roko in sem se sklonil k njej in sem jo poljubil na ustnice', S. 158)。これがすべての始まりだった。マルチは「僕の前に立ち尽くし、震え、目には涙を浮かべていた」(stala je pred mano in se je tresla in solze so ji stopile v oči', S. 158)。

マルチはそれから、「古いものばかりで、縫い合わせたり、繕いものだった」(stare reči, zašite, prenovljene', S. 158)けれども、身なりに気を使うようになった。そして前にもまして、仕事に精を出すようになった。変わったのはマルチだけではない。マルチの母親が、用もなく「僕」の部屋にやって来てはおしゃべりをし、父親までおしゃべりして帰って行くようになる。「夏の日曜日」(poleti – v nedeljo', S. 160)、「僕」とマルチが初めて関係を持つてからは、今度は「僕」が彼らの部屋へ出入りするようになり、物理的に二つの空間を隔てていた境界が失効する。外出がちだった「僕」は、ときに一日中家にいるようになり、日曜は、マルチたちのところと一緒に昼を食べ、団らんのときを過ごす。

「僕らは互いにびったり癒着してしまって、僕らの間を断ち切ったりしたら、二人とも血を流して死んでしまうって、わかっていた。いっそう僕は、得体の知れない情熱をこめて彼女を抱き、夜ごと長いあいだ彼女を待った。欲望にすっかり身を震わせながら」。

„Prirasla sva drug na drugega in vedel sem, da bi zakrvavela oba, če bi prerezala to vez med nama. Tako sem jo objemal z nerazumljivo strastjo in sem čakal nanjo dolge noči, ves trepetajoč od poželenja.“ (S. 163)

マルチの両親もまた、二人の関係を知りつつ、彼女の頼みでそれを黙っている。「彼女が彼らにそれを話したとき、二人ともとても喜んで涙した」(Obadva da sta zelo srečna in da sta se jokala, ko jima je povedala', S. 164) という。

「僕」はその一方で、「どこかに足を踏み入れてしまって、どんどん岸から遠ざかって行くような感じ」(čuti sem, da sem bil nekam zagazil in da gazim zmerom dalje od brega', S. 163) がしていて、「心の中で、どうやって逃げ出せるか考えていた」(v srcu pa sem mislil, kako bi ubežal', S. 163)。そんなある日「僕」は、夜中の 1 時に仕事を終え、「疲れ果て」(izmučena', S. 163) て彼のところにやってきたマルチに、残酷な質問を向ける。

「マルチ、きみは何のために生きているの？まだ夜が明ける前から、ほとんど一晩中、いつも同じ仕事ばかり！こんな暮らしがきみに何になるっていうの？きみには何があるっていうわけ？」。

„Čemu pa je tebi življenje, Malči? Še predno je dan, pa skoro vso noč, zmerom isto delo! Kaj imaš v tem življenju, kaj imaš na svetu?“ (S. 163)

マルチはゆっくりと話し始める。結婚後の二人の生活、すてきな住まい、彼女が「僕」を愛していて、彼が「どんなに優しく、思いやりがあって、自分のことばかり考える人ではない」(tako blag in usmiljen in nesebičen', S. 164) か。「お金持ちの」(bogat', S. 164) きれいな娘さんを手に入れられたはずなのに、自分のようなこぶ付きの、「みすぼらしい」(ubog', S. 164) お針子を選んでくれた。そして彼女もまたそんな「僕」に、限らない愛情を捧げてくれるという。けれどもこのとき、「僕」にはわかった。

「彼女が僕をこの陰鬱な町外れに、永久に縛りつけようとしていたことが。当時僕が送っていた気遣いじみた生活に。それで身体じゅう心底寒くなって、気がついた。僕が彼女を愛していないってこと、そして僕の欲望が汚らしい、卑劣なものだったって」。

„da me je mislila privezati za zmerom na to temno predmestje, na to blazno življenje, ki sem ga živel v tistih časih. In ker me je zaradi tega zazebló po vsem telesu do dna srca, sem spoznal, da je nisem ljubil in da je bilo moje poželenje umazano in nizkotno.“ (S. 164)

一週間ほどして、「僕」は「逃げ出した」(začel sem bažati', S. 166)。彼にとっては、「こうするか、将来をあきらめるかの二つしかなく」(ali to, ali pa križ čez prihodnost – samo to dvoje je bilo', S. 157)、これより他に仕方がなかった。

6 週間経ったある日、引越した先の「僕」を、マルチの父親が訪ねてきた。

「いまは、こちらにいらっしやるというわけですね、すてきなお部屋で」(Tukaj ste torej zdaj ... lepa izbica', S. 166)。彼はそう言うと、「微笑も」(nasmejati', S. 166) うとさえた。互いに言葉にならず、立ち尽くしたまま、痛む足を引きずりながらやってきたマルチの父親の前に、「僕」は「何か醜い、卑劣なものにとらえられ、彼をあざけり笑うのをこらえていた」(nekaj grdega in nizkotnega se me je bilo polastilo in skoro bi se mu bil zasmeljal v braz', S. 166f.)。マルチの父親は最後まで何も言えず、立ち去る前に「つばを吐いて」(pljunil', S. 167) 出ていった。「僕」は、小説の語り手「私」に向かって繰り返している。

「思うたびに責めさいなまれる。何の跡形も残らなかったみたいに、できれば永遠に消してしまいたい。消えてくれなくて、どこに行っても、どこにでも僕の人生のあの出来事が、僕について来る」。

.ki me peče v spominu in ki bi ga rad izbrisal za zmeron, tako da bi ne ostalo nobenega sledu več. Ali ne da se izbrisati in kamor grem, povsod hodi z mano tisti kos mojega življenja'. (S. 161)

けれども、「僕」には「きっと永久に消えないだろう」(bo obležalo pač za zmerom', S. 162) と、わかっていた。

クリスマスの前、「僕」は、通りでマルチを見かける。寒くて雪のちらつくなか、通り過ぎる彼女は、「小さく、やせ細って、長い、みすばらしいショールを巻いていた」(majhna in suha, zavita v dolgo siromašno ruto', S. 167)。出来た品物を町へ運んでいるのだろう、大きな箱を抱え、「彼女の顔はやせて青白く」(njen obraz je bil droben in bled', S. 167)、「唇にも、頬にも血の気がなかった」(Ne v ustnicah, ne v licih ni bilo kaplje krvi', S. 167)。マルチは「僕」には気づかず、「抱えた箱ごと、ゆっくり歩道をやって来た身なりの立派な御婦人につかつた」(Zadela se je s škatlo ob elegantno damo, ki je šla počasi po trotoarju', S. 167)。「ちょっと乞食娘、酔っ払ってるの?」(Dekle, beraško, ali si pijano?', S. 167)。女の叫び声に、「僕は、その女の前に立ちはだかつて、何か言ってやろうって思った。完全に頭に血がのぼって」(Jaz sem stopil pred to žensko in sem ji hotel nekaj reči: vsa kri mi je bila šinila v obraz', S. 167)。「僕」の怒りの矛先は、もちろんマルチに向けられたものではない。その矛先は、身なりの裕福な女性に向けられている。ただし、もはやマルチは姿を消し、彼は目の前の女性に対して怒りの言葉を発することができない。彼の怒りは彼自身のなかに留め置かれ、二つの世界を媒介することのないまま、あとには依然貧しさと豊かさの社会的対照が残される。

「お針子」が描き出す作品世界は、陰鬱で重い。しかし、物語の構成と展開は、時間軸にしたがってしっかりと組み立てられており、読む者を先へ誘う。読者を

引きつける「お針子」の魅力の一つは、マルチの描写だ。「彼女は美人ではなかった」(Ni bila lepa', S. 158)。とはいえ、小説中ネガティブな描写が多いもう一方で、マルチは折に触れ、魅力的に描かれている。「腕は真っ白で、ふっくらとは言わないまでも、やわらかい」(,roke so bile čisto bele, ne zelo polne, toda fine', S. 158)。身なりに気を使うようになってからのマルチは、「彼女の髪はもともととてもふさふさだったけれども、髪型にも少し色っぽさが見えて、女性らしく感じられた。部屋に来るといつも、彼女は自分から僕の方に来て、僕を抱きしめた。じっと僕を見つめて、彼女の目はとても幸せそうな目をしていた」(,Na frizuri – imela je zelo bujne lase – se je poznalo celo malo koketnosti, samo toliko, da se je videla ženska natura. In kadar je prišla v izbo, je stopila sama k meni in se me je oklenila. Tako me je gledala, s tako srečnimi očmi', S. 158)。「僕」が逃げ出す前の晩にも、マルチは明かりを消したあとも、ベッドの中で「可愛らしい言葉をささやき」(,šepetala ljubeznive besede', S. 164)、「子供みたいに微笑んで」(,smehljala se je kakor otrok', S. 164f.) いる。「静かな息づかいで、唇はとても赤くふっくらしていて、頬には少し赤みもさしていた」(,Dihala je rahlo, ustnice so bile zelo rdeče in napete, celo na licih je bilo nekoliko rdečice', S. 165)。

「彼女はまるで12歳の子供のようだった。彼女には罪の跡形など何もなく、若々しい顔からは、重苦しい人生の不安や悲しみが全部消え去っていた。顔は晴れやかに澄んで、けがれなどなかった」。

,Tako je bila podobna dvanajstletnemu otroku; sledu greha ni bilo na nji, vsa skrb, vsa žalost težkega življenja je izginila z mladega obraza; čelo je bilo jasno in nedolžno'. (S. 165)

マルチの行く末を思う読者は、結末の残酷さをよりいっそう強く感じる。

2. ウィーンの労働者街オッタクリング

作者ツェンカルが町の名前に言及しない以上、「お針子」の舞台は匿名の、架空の町であることに変わりはない。物語の言語はスロヴェニア語であり、舞台がリュブリャーナでも、マリボル (Maribor) (ドイツ語名マールブルク (Marburg an der Drau)) やツェリエ (Celje) (ドイツ語名ツィリ (Cilli)) でも、トリエステ (Trieste) (スロヴェニア語名トルスト (Trst)), あるいはグラーツ (Graz) (スロヴェニア語名グラデーツ (Gradec)), クラーゲンフルト (Klagenfurt) (スロヴェニア語名ツェロヴェツ (Celovec)) であっても構わない。ただし、町外れから町に入って、反対側の町外れまで、ほぼ駆け足で「1時間ほどの距離」があり、人々の暮らしぶりが匿名性のある都市生活であること、町には大学があり、

そして何よりもツァンカル自身が小説の構想から執筆にいたるまで、ウィーン、オッタクリングで過ごしており、クラリチーニが示唆するように、舞台がウィーンである蓋然性は高い。

ツァンカルが暮らした時代、オッタクリングには、多くの労働者たちが暮らしていた⁽¹⁸⁾。1890年にウィーン市に合併されたとき、オッタクリングの人口は10万人を超える程度だった。1910年にはそれが18万人弱ほどに増え、ウィーンで最も人口の多い区となっている⁽¹⁹⁾。田口晃『ウィーン 都市の近代』（2008年）によれば、1900年の統計では、4割弱が市外からの移住者で、最も多いチェコからが1万1,000人、8万人の就業者のうち6万人が労働者で、繊維・衣料、金属・機械、木工、建設、ボタン製造などの家内工業も含めると、全体の4割が女性だった⁽²⁰⁾。

ツァンカルは、1913年夏、自らが社会民主主義に身を投じるにいたった経緯を書いた、「いかにして私は社会主義者になったか」(Kako sem postal socialist, 1913) で、当時の16区、オッタクリングの様子を伝えている。

私は当時、まるで一つの巨大な作業場にも似た、ウィーンの16区に暮らしていた。この区は社会民主党の牙城だったばかりでなく、同時に貧困と結核の住みかだった。精神薄弱者、心の貧しい者にも、沈思黙考を強いる事柄を日々私は目にした。社会「秩序」の不正が、通りにそのまま晒され、恥知らずにむき出しの形ではびこっていた。冬には、寒さと雪のなか、失業者たち、「自立した」、腹を空かせた小手工業者たちの家族が、通りに投げ出されていた。意識をなくし、舗道に横たわったままの人間を私は見た。シュナップスを飲みすぎたのだと、誰もが思った。救急車が呼ばれ、医者が来て、ぼろを着た結核患者が倒れたのは、泥酔なんかじゃなくて、空腹が原因だったとわかった。Živel sem takrat v šestnajstem okraju dunajskem, ki je ves podoben eni sami ogromni delavnici. Ta okraj ni samo trdnjava socialne demokracije, temveč obenem dom uboštva in jetike. Tam sem gledal dan za dnevno stvari, ki bi morale tudi duševno plitkega in v srcu revnega človeka siliti k premišljevanju. Krivičnost družabnega „reda“ se je kar na cesti razkazovala in razmahovala v vsi svoji brezsrarni goloti. Pozimi, v mrazu in snegu, so metali na ulico družine brezposelnih delavcev in „samosvojih“, stradajočih malih obrtnikov. Videl sem človeka, ki je bil brez zavesti obležal na tlaku; mislili so, da je žganja pijan; ko so poklicali rešilni voz, je zdravnik dognal, da se razcapani jetičnik ni bil zgrudil vsled pijanosti, temveč vsled gladu.⁽²¹⁾

ツァンカルは、部屋を借りていたアルビナ・レフラーと、その子供たちの暮らし

についても書いている。

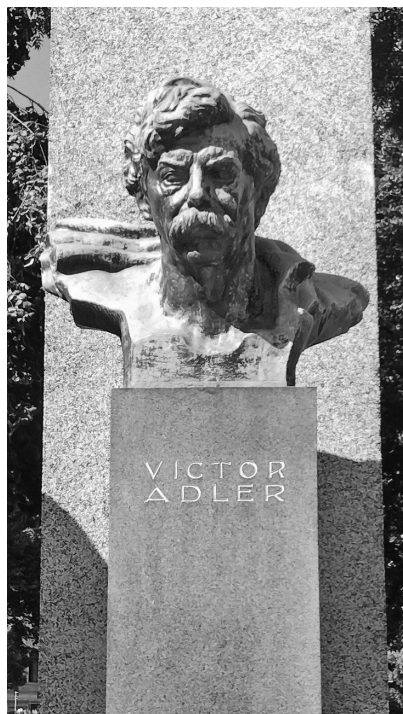
私はただし、悲惨と憂いと不正を目にしようとせば、通りへなど行く必要はなかった。私は男もののネクタイをつくる、お針子のところで暮らしていた。彼女だけが働いていたわけではない。彼女の子供たちも動員されていた。彼らは学校から帰ってくると、夜になるまで働いた。彼女の稼ぎはネクタイ 1 ダース分に対して、25から30クロイツァーだった。しかし買い手が寝不足で機嫌が悪かったりすると、相手はいくらでも値切ることができた。腹を空かせた女労働者を探すことなど、たやすいことだった。彼女はそれでも、冬の間はどうかやって行けた。しかし仕事のない夏場は、彼女は質屋詣での、聖地巡礼だった。ともを許されたのは、初めは労働者のささやかな「贅沢品」、指輪やイヤリング、しまいに服やシャツが一つ、また一つと。隣人たちはこの家族を、彼らよりも「上」だと思っていた。理由はおそらく、この家族に毎日食べるものがあり、ちゃんと服を着て、結核ではなかったからだった。

Ali še na cestu mi ni bilo treba stopiti, če sem hotel gledati bedo in skrb in krivico. Stanoval sem pri šivilji, ki je izdelovala kravate za moške; delala ni le sama, vpreženi so bili tudi njeni otroci, koj ko so prišli iz šole pa vse do noči. Zaslužila je po petindvajset do trideset krajcarjev za tucat kravat. Če pa je bil trgovec čemeren, ker je slabo spal, je odtegnil, kolikor je hotel, zato ker je bilo lačnih delavk na izbiro. In kljub vsemu je za silo še izhajala – pozimi; toda poleti, ko ni bilo dela, je romalo v zastavnico, kar je moglo romati; najprej ponižni „luksus“ delavke, prstani in uhani, naposled pa obleka in perilo kos za kosom. To družino so smatrali sosedje za „boljšo“, najbrž zato, ker je vsaki dan obedovala, ker se je spodobno oblačila in ker ni bila jetična.⁽²²⁾

ウィーンに上京前のツァンカルは、「社会主義についてなど何も知らず、社会民主主義に関する知識は、それが一種の政治的セクトであり、いわば教会や国から排除され、警察や検察があらゆる面から監視しているという程度のものであった」

(O socializmu nisem vedel ničesar, o socialni demokraciji pa le toliko, da je nekakšna politična sekta, ki je takorekoč izobčena iz cerkve in države in ki jo stražijo od vseh strani policisti in državni pravdniki)⁽²³⁾。ツァンカルは、ウィーン、オッタクリングで、スロヴェニア語による創作に精力を注ぐもう一方で、貧しさと豊かさの社会的対照を橋渡しすべく、社会民主主義運動との関わりを強めていく。選挙を翌年に控えた1906年、ツァンカルが上に「社会民主党の牙城」と記したウィーン16区、オッタクリングの社会民主黨員は、女性2,103名を含む1万2,036名を数えた⁽²⁴⁾。

3. ツァンカルの見たスロヴェニアの未来



ヴィクトル・アドラー像
(2023年9月、撮影筆者)

オーストリア社会民主労働者党 (Sozialdemokratische Arbeiterpartei Österreichs) は、1889年に結成された。1888年12月30日から翌年1月1日にかけて、低地オーストリアのハインフェルト (Hainfeld) で第1回党大会が開かれ、厳しい監視の目を逃れて、左右両派の社会主義者、労働組合の代表者110名が参集した。このとき非凡な手腕を発揮し、分裂状態にあった労働運動を一本化したのが、ヴィクトル・アドラー (Viktor Adler, 1852-1918) だった。党綱領は、110名の代表者のうち保留3、反対1の、圧倒的多数の賛成で決定された⁽²⁵⁾。村山雅人は『反ユダヤ主義——世紀末ウィーンの政治と文化』(1995年)の中で、左右両陣営の統一に向けた、アドラーの努力について述べている。

とくに、目を引くことは、急進派が穏健派に譲歩し、暴力革命や個々のテロ行為を放棄したことである。すなわち、暴力によって労働者の生活条件の改善を獲得するのではなく、賢く教育することによって生活環境を改善しようとした、穏健派の運動理念が通ったわけである。この綱領をまとめたアードラーは、修正主義者や日和見主義者、マルクス主義の裏切り者との非難に甘んじなければならなかった⁽²⁶⁾。

とはいえ、その後社会民主党は、国際主義、すべての人間および諸民族の平等、普通・平等・直接選挙制の実現、8時間労働制をはじめとする労働者の権利獲得・保護、政教分離といった目標を掲げて、アードラーを中心に急速に組織化を進めていく⁽²⁷⁾。

1899年9月、モラヴィアのブリュン（Brünn）（チェコ語名ブルノ（Brno））で行われた党大会では、ツァンカルがのちに自身の選挙演説で言及する、民族問題に関する社会民主党の正式見解と対策、「ブリュン綱領」（Brünner Programm）が決定されている。

1. オーストリアは民主的な諸民族連邦国家に再構築されねばならない。
2. 歴史的諸州に代わって、民族別に区分された自治体が形成され、その立法および行政は、普通・平等・直接選挙権に基づいて選出される、民族議会によって行われる。
3. 同一民族のすべての自治領域は、民族的統一連合体を形成し、自身の民族的案件について、完全に自律的に対処する。
4. 少数民族の権利は、帝国議会によって決議される、独自の法律によって守られる。
5. 我々はいかなる民族的特権も認めず、それゆえ一つの国家語に対する要求は拒否する。仲介言語の必要性については、帝国議会の決定に委ねる。

1. Österreich ist umzubilden in einen demokratischen Nationalitätenbundesstaat.

2. An Stelle der historischen Kronländer werden national abgegrenzte Selbstverwaltungskörper gebildet, deren Gesetzgebung und Verwaltung durch Nationalkammern, gewählt auf Grund des allgemeinen, gleichen und direkten Wahlrechtes, besorgt wird.

3. Sämtliche Selbstverwaltungsgebiete einer und derselben Nation bilden zusammen einen national einheitlichen Verband, der seine nationalen Angelegenheiten völlig autonom besorgt.

4. Das Recht der nationalen Minderheiten wird durch ein eigenes, vom Reichsparlament zu beschließendes Gesetz gewahrt.

5. Wir anerkennen [sic!] kein nationales Vorrecht, verwerfen daher die Forderung einer Staatssprache; wie weit eine Vermittlungssprache nötig ist, wird das Reichsparlament bestimmen.⁽²⁸⁾

オーストリア社会民主党の意思決定は、民族ならびに言語の平等を謳った憲法第19条の具現化の一つであり、多民族国家オーストリアの解体を目指すものではなかった。

1907年5月に行われた帝国議会第1回普通選挙の結果、社会民主党は全516議席中87議席を獲得して、単独では議会最大政党に躍進を遂げる。居住比率に応じて、民族別に議席が配分され、スロヴェニア人からも各地を代表して24人の議員が派遣された。ツァンカルの所属する南スラヴ社会民主党は、1896年にリュブリャナで結成されているが、この選挙改革後にも帝国議会に議席を得ることはなかった。州全体で12名中、ドイツ人1名、スロヴェニア人11名の、最も多くスロヴェニア人議員を選出するクライン州では⁽²⁹⁾、冒頭に見た通り、1896年から1908年まで、リベラル派がドイツ人大土地所有者たちと連立を組み、クライン州議会で多数派を保持していた。クレクなどの指導のもと、スロヴェニア人民党を擁するキリスト教社会主義運動は、農村部での支持を背景に、次第に都市や商業地にも攻勢を強める。

社会民主党は、ウィーン同様スロヴェニアでも、オーストリアの政治、生活の民主化のため、「女性、男性ともに普通かつ平等な選挙権、教会と国家の分離、無償かつ超宗派の授業、労働者の要求の実現」⁽³⁰⁾といった目標を掲げ、同業者・労働組合諸組織と連携しながら、政治集会、ストライキの支援、消費者組合団体や同業組合の創設に取り組んでいる⁽³¹⁾。ただし、ペテル・ヴォドピヴェツ (Peter Vodopivec, 1946-) も指摘するように、社会民主主義運動の主だった中心は工・鉱業都市であり⁽³²⁾、スロヴェニア人たちのあいだで、社会民主主義運動が十分な浸透を見ることはなかった。スロヴェニア人の住む地域は、オーストリア＝ハンガリー帝国が最終的に解体する1918年まで、概して農村の性格を保持し、1910年の段階で人口の67%が農村部に暮らす、「ハブスブルク君主国のなかでも、著しく工業化の遅れた地域」⁽³³⁾に属していた。

1907年の選挙の結果、スロヴェニア人民党は、スロヴェニア人議席のほぼ4分の3を獲得する。ツァンカルが立候補したクライン8区、リュブリャナの東方リティヤ・ザゴリエ (Litija - Zagorje) 選挙区でも戦況は同じだった。有権者数8,408名中、スロヴェニア人民党のフランツ・ポウシェ (1845-1916) の得票4,751票、ツァンカル1,302票、その他34票で、ポウシェの圧勝に終わった⁽³⁴⁾。1907年4月1日、リュブリャナで行われた選挙戦最初の演説の中で、ツァンカルは教権派、つまりスロヴェニア人民党がクライン州の、リベラル派がリュブリャナの利益を代表するに過ぎず、帝国各地に散在する全スロヴェニア人の未来を託せ

るのは、社会民主党以外にないと訴えている。

(…) 社会民主党のブリュン綱領は、リベラル派や教権派がとっくに忘れてしまった、48年のスロヴェニア人の民族綱領を再び呼び覚ましてくれました。統一スロヴェニアを求める唯一の政党は、社会民主党です。(…) 社会民主党の国際主義は、自由と権利の平等の基盤、民族の自治と自律の基盤に基づいています。(…) 社会党が唯一、全スロヴェニア人の政党なのです。

Brnski program socialne demokracije (...) je obudil narodni program Slovencev iz leta osemindesetega, ki so ga liberalci in klerikalci že davno pozabili. Edina stranka, ki zahteva zedinjeno Slovenijo, je soc. Demokracija. (...) Socialnodemokratski internacionalizem sloni na podlagi svobode, enakopravnosti, na podlagi narodne samouprave in avtonomije.

(...) Socialna stranka je edine vseslovenska stranka.⁽³⁵⁾

ツァンカルの訴えが、当時のスロヴェニア人たちの心をつかむことはなかった。

社会民主主義運動が取り組んだいま一つの重要な取り組みとして、文化的な活動が挙げられる。「賢く教育することによって生活環境を改善しようとする」ことが企図されており、教育努力は、オーストリアの社会民主主義運動に特徴的な取り組みだった。労働者の居住地域では、あちこちでサークルや協会、クラブなどの組織が作られ、労働者が教養を身につけられるよう、普及が図られた⁽³⁶⁾。1906年のウィーン16区、オッタクリングでは、速記協会などの教育協会のメンバー731名、3つの労働者合唱団、2つの労働者劇団、さらには体操協会などのメンバー576名といった記録が残されている⁽³⁷⁾。

イヴァン・ツァンカルの小説「お針子」は、一人の学生と、貧しさのなか、ひたむきに生きるお針子マルチとの悲恋を描いている。青春時代の、甘い、やり切れない恋物語を描いているように見えて、貧しさのなか懸命に生きる人々と、無自覚に豊かな生活を送る人々との社会的対照が描き出され、ツァンカル自身が小説の構想から執筆までを過ごした、20世紀初頭のウィーンの労働者街オッタクリングを髣髴とさせる。オッタクリングは当時、まさに「社会民主党の牙城」だった。ツァンカルは、ウィーン、オッタクリングで、スロヴェニア語による創作に精力を注ぐもう一方で、貧しさと豊かさの社会的対照を橋渡しすべく、社会民主主義運動との関わりを強めていく。落選したとはいえ、1907年5月、ツァンカルは南スラヴ社会民主党候補として、帝国議会議員選挙に立候補している。ツァンカルが、社会民主主義との関わりを強めたもう一つの理由は、民族、とりわけ言語をめぐる問題だったと考えられる。ツァンカルは、オーストリア社会民主党の民族問題に対する回答「ブリュン綱領」に、48年の革命の精神、それを受け継ぐ

憲法第19条の精神を見ていた⁽³⁸⁾。

スロヴェニアの社会民主主義運動を指導したのは、「ツァンカルの友人、政治的助言者」⁽³⁹⁾にして、「指導的理論家、作家、ジャーナリスト」⁽⁴⁰⁾のエトビン・クリスタン (Etbín Kristan, 1864-1953) だった。しかしツァンカルは、1907年の選挙後まもなく、クリスタンと距離を置くようになる。来るべき南スラヴ国家におけるスロヴェニアの役割をめぐる、二人の間に不和が生じる。クリスタンが、スロヴェニア人を含む「南スラヴ人の文化的、言語的統一」⁽⁴¹⁾を支持したのに対して、ツァンカルにはそれを支持することができなかった⁽⁴²⁾。ツァンカルは、歴史上折に触れ登場する、スロヴェニア語と南スラヴ諸語との統一問題について、つねに反対の立場を取っている。ドイツ語も自在のツァンカルだったが、スロヴェニア語はツァンカルにとって、単に文化的アイデンティティーの基盤だったばかりでなく、それにより世界とつながり、生きる唯一の方法だった⁽⁴³⁾。

註

- (1) 大津留厚「3章 ハプスブルク帝国の民族問題」(木戸薨、伊東孝之編『東欧現代史』(有斐閣、1987年) 45~70頁所収) 48頁。
- (2) 矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究』(岩波書店、1977年) 292頁。
- (3) 同掲書、292頁。
- (4) オーストリア共和国「連邦法情報システム」(RIS (Das Rechtsinformationssystem des Bundes))。Auf: <https://www.ris.bka.gv.at/GeltendeFassung.wxe?Abfrage=Bundesnormen&Gesetzesnummer=10000006> (2024年4月14日最終閲覧)
- (5) 大津留厚『【増補改訂】ハプスブルクの実験——多文化共存を目指して』(春風社、2007年) 118頁以下参照。
- (6) 村山雅人『反ユダヤ主義——世紀末ウィーンの政治と文化』(講談社、1995年)、52頁以下、大津留厚『【増補改訂】ハプスブルクの実験——多文化共存を目指して』87頁以下、小沢弘明「第6章 二重制の時代」(南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』(山川出版社、1999年) 218~257頁所収) 232頁以下、江口布由子「1897年のバダニー言語令事件：オーストリア社会民主党およびキリスト教社会党の指導層の動勢を中心に」(九州大学大学院比較社会文化研究科『比較社会文化研究』第3巻、1998年、21~32頁)、イアン・カーショウ『ヒトラー上 1889-1936 傲慢』(川喜田教子訳、石田勇治監修、白水社、2016年) 60頁以下参照。Vgl. Ian Kershaw: *Hitler 1889-1936: Hubris*. London (Penguin Books) 2001. S. 32ff.
- (7) 田口晃『ウィーン 都市の近代』(岩波書店、2008年) 116頁。
- (8) Adolf Hitler: *Hitler, Mein Kampf. Eine kritische Edition. Band 1*. Herausgegeben von Christian Hartmann, Thomas Vordermayer, Othmar Plöckinger und Roman Töppel. Unter Mitarbeit von Pascal Trees, Angelika Reizle und Martina Seewald-Mooser. München – Berlin (Institut für Zeitgeschichte) 2016. S. 313.
- (9) 世紀転換期のウィーンとスロヴェニアにおける政治と社会状況の概観については、拙論「世紀転換期のウィーンとスロヴェニア——キリスト教社会主義運動とイヴァン・ツァンカル」(國學院大學『國學院雑誌』第124巻第11号、2023年、61~75頁) 参照。
- (10) Ivan Cankar: Šivilja. In: Ivan Cankar: *Zbrano delo. 9. Tujci / Ob zori / Nezbrane črtice 1900-1902*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravil in opombe napisal Dušan

Voglar. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1970. S. 156-167. 本書からの引用は以下、本文中に頁数を付記して引用する。

タイトルの ‚šivilja‘ は、動詞 ‚šivati‘ 「縫う」に由来し、普通名詞で「縫いものをする女性」を意味し、また、「縫いものを生業とする女性」の意で、職業を表す名詞としても用いられる。1994年に出版されたエルヴィン・ケストラー (Erwin Köstler, 1964-) によるドイツ語訳も同様で、‚šivati‘ に当たる ‚nähen‘ に由来する、‚Näherin‘ 「縫いものをする女性」、‚縫いものを生業とする女性‘ が、訳語として当てられている。Ivan Cankar: *Die Näherin*. In: Ivan Cankar: *Vor dem Ziel. Literarische Skizzen aus Wien*. Aus dem Slowenischen und mit einem Vorwort von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1994. S. 79-99.

この小説には、小泉淳二によるドイツ語からの良訳、「お針子」がある。タイトル ‚šivilja‘ の日本語訳には、本稿でも、そのまま「お針子」を当てた。イヴァン・ツァーンカル「お針子」(小泉淳二訳、茨城大学独文学論集編集委員会『茨城大学独文学論集』第2号、2006年、1~16頁)。

- (11) Vgl. Dušan Voglar: Opombe. In: Ivan Cankar: *Zbrano delo*. 9. S. 289-399. S. 377.
- (12) 拙論「スロヴェニア・モデルネの誕生——イヴァン・ツァーンカルのウィーン」(國學院雑誌『國學院雑誌』第121巻第6号、2020年、1~19頁) 参照。
- (13) Vgl. Aljoša Harlamov: Kronološki pregled Cankarjevega življenja in dela. In: Ders. (Hg.): *Ivan Cankar: Literarni revolucionar*. Ljubljana (Cankarjeva založba) 2018. S. 285-288. S. 286.
- (14) Maria Vera Claricini: Cankars Wien – ein Ausschnitt der Stadt. Das Bild Wiens in der slowenischen Literatur. In: Gertraud Marinelli-König, Nina Pavlova (Hg.): *Wien als Magnet? Schriftsteller aus Ost-, Ostmittel- und Südosteuropa über die Stadt*. Wien (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften) 1996. S. 393-435. S. 409.
- (15) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 2*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1993. S. 633.
- (16) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 3*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1994. S. 612.
- (17) アレシユ・ガブリチ (アンドレイ・ベケシュ訳) 「第41章 学校教育——母語による教育が成し遂げた飛躍」(柴宜弘、アンドレイ・ベケシュ、山崎信一編著『スロヴェニアを知るための60章』(明石書店、2017年) 236~241頁所収) 237頁参照。
- (18) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 4*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1995. S. 470.
- (19) 田口晃、146頁参照。
- (20) 同上。
- (21) Ivan Cankar: Kako sem postal socialist. In: Ders. *Zbrano delo*. 25. *Politični članki in satire / Govori in predavanja*. Glavni urednik Anton Ocvirk. Knjigo pripravila in opombe napisala Dušan Voglar in Dušan Moravec. Ljubljana (Državna založba Slovenije) 1976. S. 114-121. S. 118f. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. In: Ders.: *Weißes Chrysantheme. Kritische und politische Schriften*. Aus dem Slowenischen übersetzt, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 2008. S. 286-297. S. 292f.
- (22) Ivan Cankar: Kako sem postal socialist. S. 119. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. S. 293.
- (23) Ivan Cankar: Kako sem postal socialist. S. 114. Ders.: Wie ich zum Sozialisten wurde. S.

- 286f.
- (24) 田口晃、148頁参照。
- (25) Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 1*. Wien (Verlag Kremayr & Scheriau) 1992. S. 17. 村山雅人、88頁以下、矢田俊隆「オーストリア社会民主党と民族問題」(北海道大学スラブ研究センター『スラブ研究 (Slavic Studies)』第7巻、1963年、15~56頁) 21頁以下参照。
- (26) 村山雅人、89頁。
- (27) イアン・カーショー、63頁以下参照。Vgl. Ian Kershew, S. 35f. 小沢弘明、237頁以下参照。
- (28) Ludwig Brügel: *Geschichte der österreichischen Sozialdemokratie. IV. Festigung der Organisation: vom Privilegienparlament zum Volkshaus (1889 bis 1907)*. Wien (Wiener Volksbuchhandlung) 1923. S. 339.
- (29) 大津留厚『【増補改訂】ハプスブルクの実験——多文化共存を目指して』171頁参照。クライン州以外でスロヴェニア人に議席が配分された州は、イストリア (イタリア系3、セルビア・クロアチア系2、スロヴェニア系1)、ゲルツ・グラディスカ (スロヴェニア系3、イタリア系3)、シュタイアーマルク (ドイツ系23、スロヴェニア系7)、ケルンテン (ドイツ系9、スロヴェニア系1)、トリエステ (イタリア系4、スロヴェニア系1) の、計5州ある。
- (30) Peter Vodopivec: Von den Anfängen des nationalen Erwachens bis zum Beitritt in die Europäische Union. In: Peter Štih - Vasko Simoniti - Peter Vodopivec: *Slowenische Geschichte. Gesellschaft - Politik - Kultur. Aus dem Slowenischen übersetzt von Mag. Michael Kulnik*. Graz (Leykam) 2008. S. 217-518. S. 287.
- (31) Vgl. ebd. S.287f.
- (32) Vgl. ebd. S.287.
- (33) Ebd. S. 301.
- (34) Die Ergebnisse der Reichsratswahlen in den im Reichsrat vertretenen Königreichen und Ländern im Jahre 1907. In: *Österreichische Statistik. LXXXIV. Band, 2. Heft*. Herausgegeben von der k. k. Statistischen Zentralkommission. Wien (kaiserlich-königliche Hof- und Staatsdruckerei) 1908. S. I. 20. Auf: <https://alex.onb.ac.at/cgi-content/alex?aid=ors&datum=0084&page=359> (2024年4月14日最終閲覧)
- (35) Ivan Cankar: [Govor na volilnem shodu v Ljubljani] . In: Ders. *Zbrano delo. 25*. S. 155-157. S. 157. Ders.: [Rede auf der Wahlversammlung in Ljubljana] . In: Ders.: *Weißer Chrysantheme*. S. 198-201. S. 201.
- (36) 村山雅人、89頁以下参照。Vgl. Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden. Band 1*. S. 140f.
- (37) 田口晃、146頁以下参照。
- (38) 拙論「オーストリア=ハンガリー帝国下の一学校教師——イヴァン・ツァンカル『マルティン・カチュール』」(國學院大學外国語文化学科『Walpugis 2023』、2023年、41~54頁)、47頁以下参照。
- (39) Erwin Köstler: Nachwort. In: Ivan Cankar: *Nina · Kurent. Zwei Erzählungen*. Aus dem Slowenischen übersetzt von Erwin Köstler und Kristina Kallert. Mit Anmerkungen und einem Nachwort von Erwin Köstler. Klagenfurt/Celovec (Drava Verlag) 1999. S. 235-247. S. 240.
- (40) Peter Vodopivec, S. 288.
- (41) Erwin Köstler: Anmerkungen. In: Ivan Cankar: *Weißer Chrysantheme*. S. 449-501. S. 475.

Ann. zu S. 199.

(42) Vgl. ebd. S. 474f. Ann. zu S. 199 ; ebd. S. 493. Ann. zu S. 306.

(43) 拙論「スロヴェニア・モデルネの誕生——イヴァン・ツァンカルのウィーン」、とりわけ9頁以下参照。